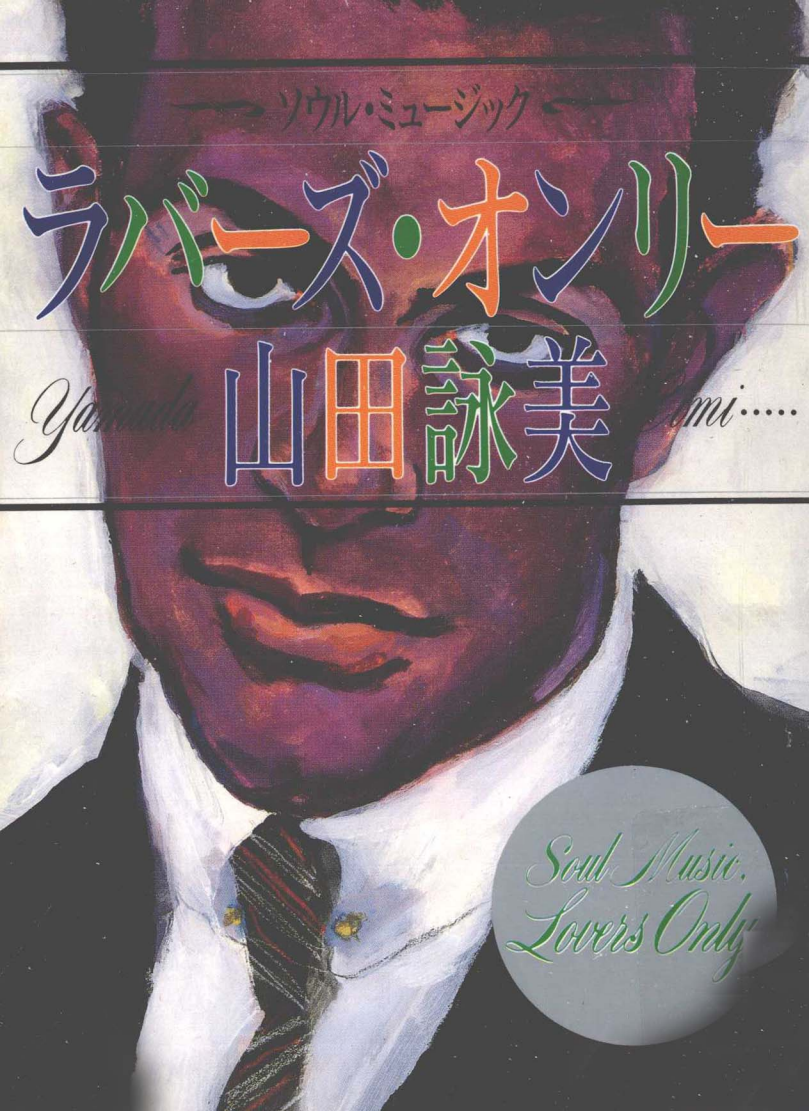
ソウル・ミュージック
ラバーズ・オンリー
山田詠美
Yamada Eimi……
Soul Music.
Lovers Only

ソウル・ミュージック
ラバーズ・オンリー

山田詠美（やまだえいみ）

角川文庫　6943

昭和六十二年十一月十日　初版発行
昭和六十三年二月十日　五版発行
発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話　編集部（〇三）二三八—八四五一
営業部（〇三）二三八—八五二一
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——大日本印刷　製本所——多摩文庫
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。
Printed in Japan

ISBN4-04-171001-4　C0193

ソウル・ミュージック

# ラバーズ・オンリー

山田詠美

角川文庫 6943

# 目　次


WHAT'S GOING ON　5

ME AND MRS. JONES　33

黒い夜　59

PRECIOUS PRECIOUS　85

MAMA USED TO SAY　111

GROOVE TONIGHT　137

FEEL THE FIRE　163

男が女を愛する時　189

あとがき　215

解説・村上 龍　218


试读结束：需要全本请在线购买： www.erto

装画／小野利明

# WHAT'S GOING ON

アイダたちにとって化粧室（バスルーム）に行くということには重大な意味がある。バスルームに行って来るわと連れの男に言い残して、ダンスフロアを横切り通路に出る。そしてレディスと掛けられたドアを開くまでの数分間。週末にクラブに出かける楽しみは、その数分間に凝縮されている。通路には何をするでもない男たちが壁に寄りかかって雑談をしている。美しく着飾った女がそこを通り過ぎる時、彼らの視線は一斉に、女の歩いて行く方向に移動する。そして、しばらくその女についての話題に集中する。彼らはその時には、声をかけない。しばらくして女がバスルームから出て来る。男たちは、今度は黙っていない。口笛を吹く者もいるし、感嘆のひとり言を呟くものもいる。そして、女に歩みより、質問責めにしたりする。だから、最初にバスルームに入る時の男の視線がどれほど好奇心にあふれているかで、その晩の女がどれだけ魅力的であ

るかが証明されるのだ。

女は、その数分間は自分の男と席に着いている時よりも緊張する。そして、自分の男の機嫌を思いやることなく、男たちの視線を堪能する極上の楽しみの時間でもある訳だ。

アイダは今、バスルームで満足している。鏡の前で髪に逆毛を立てていると、見知らぬ女が肩を叩き、今日はずいぶんと素敵じゃない、と声をかけて行く。隣では友人のシーラが、ソファに落ち着いてしまい、化粧を直している。彼女はとても気分を害している。男たちが自分を欲しそうな目つきで見ないと彼女はとても嫌な気持になるのだ。アイダもむろん同じだったが、太股までスリットの入ったドレスが功を奏してか、バスルームのドアに手をかけた時、沢山の目が、今晩は明らかに彼女の背中に張り付いていた。

広いバスルームは、そのことに命を賭けている女たちで一杯だった。そこで交される女たちの会話というものは、男たちのそれとまるで同じだった。

ねえ、あの入口のところでグラス持ってる男見た？　何よ、あたしが先に目をつけたんだからね。ふうん、今夜は彼といいことしちゃうつもり？　うーん、知り合って

すぐはあばずれに思われるしねえ。関係ないよ、ねえ！　誰かあの男とやったことある娘いる？　あたしやったよ。ワオ！　どうだった？　格好ばっかだよ。だめだめ。ディックは小さくて、すぐにいっちまうのよ。ＳＨＩＴ！　やめた。そうだよ、やり損だよ。ねえ、それよりジャッキーのあの服見た!?　今度はどんなやつ着てんの？　すごい派手なんだよ。あのくそ女、自分がアンジェラ・ボフィルかなんかだと思ってんだよ。ああ、殺してやりたい！　あんなマザーファッカー！　あたいの男と寝たんだよ。本当!?　あんなくそプッシィはつぶしてやんなよ。

「ジャッキーって嫌われてんだね」

「あたしも嫌いだよ。あたしのパーシーともやったんだもの」

シーラはいまいましそうに髪にピックを入れる。彼女たちは、誰が誰と寝たかということに心を砕いている。数か月前に結婚したアイダにとって、それは少し羨ましいことだった。彼女は、そういうナイトライフに終止符を打つために結婚したのだとも言えた。彼女の夫は、やんちゃで純粋で、そして大人だった。彼女は夫との落ち着いた生活に満足していたが、彼にエスコートされてクラブに来ると、やはりバスルームに行くことが彼女の一番の関心事になるのだった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto

シーラの化粧はなかなか終わらない。アイダは長いこと、ひとりでテーブルに座っているだろう夫を思い出す。そして、シーラにことわってバスルームの外に出る。

男たちの視線は一斉にアイダの体を突き刺した。その視線を目で受け止めないようにしながら、彼女は自分の腰を意識して歩いた。

「いかす女だなあ！」

「一人で来てるの？」

ヘイ、ガールという幾つもの呼びかけの声。アイダは夫といる以上の快感を味わっていた。そのひとつひとつの声をすべて聞き分けながらも、耳は、まるで不自由な振りをするという高等技術を彼女は久し振りに発揮した。顔を上に向けながら目線は下に落とすということも昔、彼女が外出する時に鏡の前で研究したものだ。

「ハイ、アイダ。あんたの旦那が寂しそうにしてるわよ」

ジャネイラは髪を編み込んで先にビーズを付けている。彼女の長い髪を全部編むのには二十四時間かかるのだそうだ。それだけの時間を不特定多数の男のために使うなんて。アイダにその気力はなかった。正確に言えば昔はあったのだが、今はひとりの男とベッドで怠惰に時間を費やす方を好んだ。前は、このジャネイラやシーラたちと

丹念に洋服を選び、少し気取ったコックテイルで体を暖めながら、クラブに向かったものだ。皆、男たちが自分のために争いを起こすことを最も興奮する出来事としてわきまえていたから、週末には必ず一騒動持ち上がった。

さすがにアイダは、そういうことに遭遇した時、緊張した面持ちになったが、シーラなどは平然としたもので、「あたしは強い男が好きよ。勝たなきゃ、あたしをモノに出来ないわよ」と、男たちをそそのかした。クラブの中でもとびきりフリーキーな女であることを彼女は自認していた。

「あんたが、あんまり出て来なくなっちゃったからつまんないわ。常連づらした田舎者ばっかでさ。ジェシィも気にかけてたわよ」

「来てるの？　ジェシィ」

「会う？　ＤＪボックスの中にいるけど」

「よしてよ。もうフリークスから抜けたんだから」

「ふうん、私たちも本当はそろそろやめたいんだよ。でも、いい男がいないのよ。あんたうまくやったわよ。いい男見つけて結婚しちゃうんだもの。皆、驚いてたわよ。で、言ってた、すぐにストリートが恋しくなるさって」

「ふふん」

アイダはジャネイラと一緒に夫の待っている席に戻った。彼にキスをしながら椅子を引き、彼女は囁く。

「アイスティを頼んでくれる？」

アイスティと呼ばれる甘くて強い酒。それを、昔、彼女は男をその気にさせようと、無理矢理その男に飲ませたものだ。今は自分自身をその気にさせるために飲む。

「ＯＫ、ベイビー」

アイダは夫の少しきつめの白いシャツのカラーを見る。私は彼のものだ。周囲の人間たちもそう確信していることに彼女は深い喜びを覚える。何人の男が彼を見て、口惜しさのあまり地団太を踏むことか。彼女は充実感を覚えた。何故、あのアイダがこの男と結婚しちまったかって？　この男は人目に触れない所で、私を大層念入りに愛してくれるのよ。愛するより愛されることが、どんなに心を気持良くするかご存じ？　アイダは彼と知りあって以来、いつも安らかだった。まるで遠くから見た公園の池の水面のように、彼女の心はとろりと静かだった。

「見てよ。あの日本人の女」

ジャネイラの声でダンスフロアに目をやる。髪の長い日本人の女の娘が黒人の男と踊っている。二人とも知り合ったばかりで、踊ることによって相手を知ろうとするかのように体を近寄らせている。

「素敵じゃない」と、アイダ。

「黒人の男には、それにぴたりと来る女たちってのがいるもんよ。なんだって最近の男たちは、ああいうのとくっつきたがるんだろう。あの薄い唇！　メイクラブしたってたいしておもしろかないわよ。ブラザーのディックはあたしたちの厚い唇のためにあるのよ」

他の男がどの女と一緒にいようと気にしないというのは、結婚してからアイダが身につけたものだった。今は、棘々しく他の女を見るジャネイラの言葉を困惑したように聞くだけだった。

「君の友人は皆、ワイルドだね。僕にはついてけないよ。君がそうでなくてよかった」

ジャネイラがバーに行ってしまうと夫はそう呟いた。アイダもかつてそうだったことを彼は知らない。アイダは気恥ずかしくなった。彼女の友人たちは彼女の夫を自分

たちとは違う種類の人間と考えていたので、あまり話をしなかった。そして今、彼女も夫と同じ種類の人間として振る舞っていた。バスルームを使うために席を離れるわずかな時間をのぞいては。

シーラが化粧室から戻って来た。今度は満足そうにしている。さぞかし多くの男が彼女の気を引こうとしていたのだろう。席に着くなり彼女はそわそわし始めた。アイダが尋ねても理由は言わない。なかなかウェイトレスが来ないので夫は直接、バーに飲み物を買いに行く。シーラは待ってましたとばかりに、体を乗り出して周囲の喧噪に負けないようにアイダの耳元で大声を出す。

「今ね、知らない男にいきなり腕をつかまれて、君はアイダの友達かって聞かれたの。イエスって言ったら、彼女を外に連れ出してこれないかって言うのよ」

「どんな男？」

「知らないから驚いてるのよ。あんたと一緒だった男なら、絶対あたし知ってると思うんだけど。いい男よ。耳に大きな金のピアスしてるの。ねえ、いつあんな男と知り合ったの。この辺の男じゃないわよ」

「ピアスって、ＤＪのジェシィじゃないの？」

「ジェシィなら、あたしだって知ってるわよ」

アイダはしばらく考えた。けれど、どうしても見当がつかない。耳にピアスをしたルッキングのいい男が、昔、彼女の周囲には沢山いすぎたから。

「見て来てよ。絶対に呼んでくれって頼まれちゃったのよ。耳元でね。ああ、あのいい匂いったら！」

アイダは好奇心にかられた。夫は混み合ったバーで友人と話をしている。彼女は立ち上がった。

彼女はとても無防備に通路に出て、男たちの視線を浴び、自分の愚かさを感じた。彼女は慌てて背筋を伸ばした。そして顎を心持ち上に上げ「気取り屋」と呼ばれる姿勢をとった時、その男を正面に見た。

「ハーイ、アイダ。どうしてる？」

彼女は驚きで口もきけなかった。何故ロドニーがこんな場所に。彼は、アイダが長いこと続けて来た「外出の日々」に終わりを告げた時に捨てた男だった。彼を捨てることで、彼女はそれまでの意地悪で傲慢で魅力的な日々の蓄積をすべて捨て去ったのだった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto